山口県埋蔵文化財調査報告第169集

下市遺跡

しも　いち

—平成５年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

1994

財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会

序

山口県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備等の諸施策が進められています。

私たちの郷土山口を築いてきた先人の永い営みを今に伝える歴史的遺産を、こうした開発工事との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会では、県営ほ場整備事業に係わる埋蔵文化財について発掘調査を実施しております。

平成5年度は、厚狭郡楠町に所在する下市遺跡の発掘調査を実施し、当時の人々の生活文化の実態を知る上で、数多くの貴重な手掛かりを得ることができました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、広く文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として活用されることを願うものであります。

終わりに、発掘調査の実施に当たってご協力をいただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人山口県教育財団　理事長　**高浜　哲**

山口県教育委員会　教育長　**高浜　哲**

例　　言

1　本書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成５年度に実施した県営ほ場整備事業に伴う発掘調査のうち、楠町大字東吉部字中河原に所在する下市遺跡の発掘調査に係わる埋蔵文化財調査報告書である。

2　調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人　山口県教育財団（理 事 長　高浜　哲）
　　山口県教育委員会　　（教 育 長　高浜　哲）
事 務 局　財団法人　山口県教育財団（事務局長　津田　信行）
　　山口県教育委員会文化課　（課　　長　小松　正憲）
　　（係　　長　乗安和二三）
調査担当　「総　括」山口県埋蔵文化財センター（所長　中村　徹也）
　　（次長　樫部　裕人）
　　（主任　村岡　和雄）
　　「調査員」財団法人　山口県教育財団事務局指導主事　白岡　太
　　藤上仁志
　　山口県埋蔵文化財センター文化財専門員　　西岡義貴
　　「援　助」山口県埋蔵文化財センター職員

3　発掘調査の実施に当り、山口県農林部耕地課、山口県下関土地改良事務所、楠町楠北土地改良区、及び地元関係各位から多大な援助、協力を受けた。

4　出土した陶器・磁器の鑑定については、山口県立美術館学芸課長榎本徹氏の指導・助言を得た。また、石器・石製品の石質鑑定は、山口県立山口博物館専門研究員亀谷敦氏に依頼した。なお、石質鑑定は、表面観察によるものである。

5　本書に掲載した地図（遺跡の位置と周辺の遺跡）は、建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図「厚狭」・「小郡」を複製使用したものである。

6　本書に使用した方位はすべて国土座標（第３座標系）で示し、標高は海抜標高である。

7　図版中の遺物番号は、実測図中の遺物番号と対応する。

8　本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

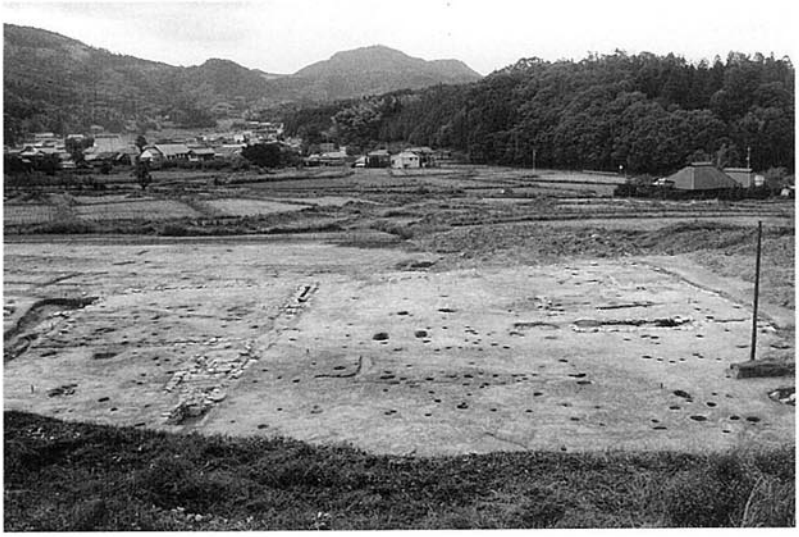
ＳＢ：掘立柱建物　ＳＦ：石組（溜枡）遺構　ＳＶ：石列　ＳＸ：集石遺構
ＳＤ：溝　ＳＫ：土壙　ＳＰ：柱穴

9　本書で採用した土色は、「新版標準土色帖」（1990年農林水産技術会議事務局/財団法人日本色彩研究所　監修）に依った。

10　本書の作成・執筆は、中村の指導・助言を得て、西岡・白岡が分担作成し、白岡が編集した。

本文目次

Ⅰ　遺跡の位置と環境……1
Ⅱ　調査の経緯と概要……2
Ⅲ　遺　　構……7
　1　石組（溜枡）遺構
　2　集石遺構
　3　井　　戸
　4　掘立柱建物
　5　土　　壙
Ⅳ　遺　　物……13
　1　土　　器
　2　石製品
　3　金属製品
Ⅴ　ま と め……16



下市遺跡より荒滝山を望む

挿図目次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
第２図　調査区設定図 …… 2
第３図　遺構配置図 …… 3・4
第４図　Ｉ地区遺構配置図 …… 5・6
第５図　ＳＦ01実測図 …… 7
第６図　ＳＦ02実測図 …… 8
第７図　ＳＦ03、ＳＸ01・02実測図 …… 9
第８図　ＳＥ01実測図 …… 10
第９図　掘立柱建物実測図 …… 11
第10図　土壙実測図 …… 12
第11図　出土遺物実測図(1) …… 14
第12図　出土遺物実測図(2) …… 15

図版目次

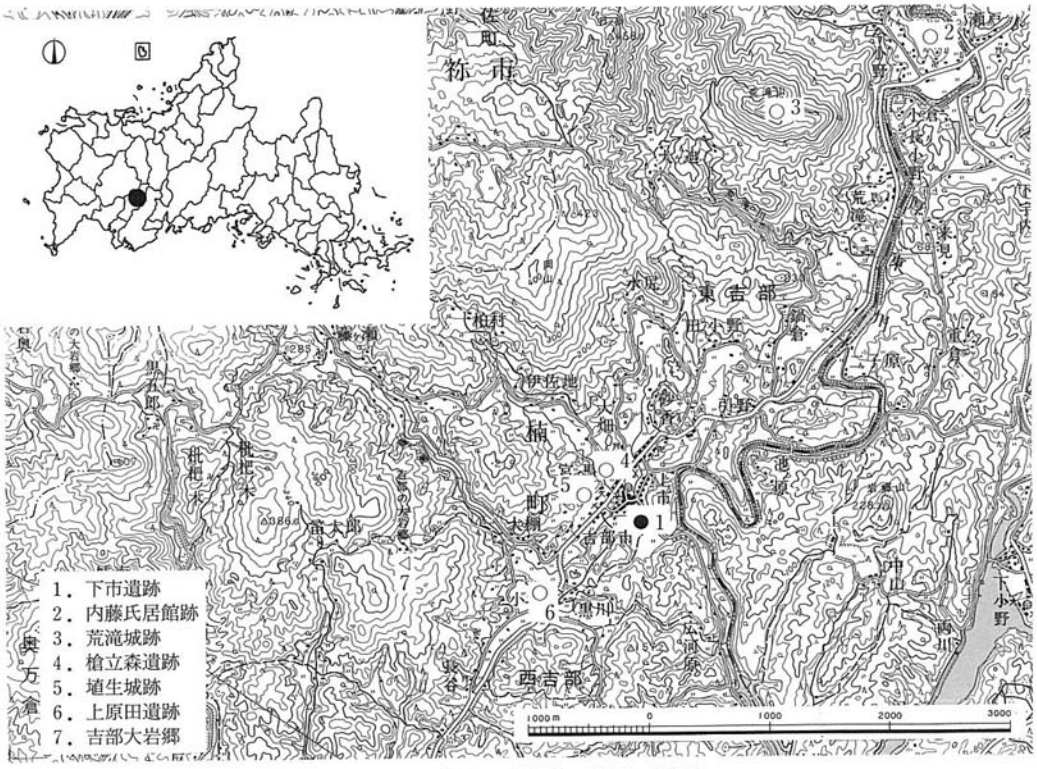
図版１　空から見た吉部盆地
　　調査区遠景（西・埴生山から）
図版２　調査区全景
　　Ｉ地区全景
図版３　ＳＥ01完掘（東から）
　　ＳＦ02（南から）
　　ＳＦ02完掘（東から）
図版４　ＳＦ01・02、ＳＤ01（東から）
　　石で埋められたＳＦ03（東から）
　　ＳＦ03完掘（東から）
図版５　ＳＸ01・02、ＳＶ03（南から）
　　ＳＦ04完掘（西から）
　　ＳＥ01(西から)
図版６　ＳＤ05（南から）
　　ＳＢ02（西から）
　　ＳＫ17遺物出土状況（北から）
図版７　出土遺物（１）
図版８　出土遺物（２）

Ⅰ　位置と環境

下市遺跡は、厚狭郡楠町大字東吉部字中河原に所在する中世の集落跡である。山口県の南西部、南北に細長く広がる楠町の北東部に当たる東吉部は、周囲を日の岳山地と厚東丘陵に囲まれ、その南西２ kmには、国指定天然記念物として有名な吉部の大岩郷がある。遺跡のある吉部盆地は、東吉部のほぼ中央部を占め、東部を南下する厚東川や日の岳山地の谷筋を流れるその支流が、吉部市付近で合流して形成した谷底平野である。この盆地の南端、通称西の山の丘陵が北東にのびた舌状の微高地に本遺跡が位置する。

吉部周辺において、これまで発掘調査の例がなく、周知の遺跡も少ない。中世以前の遺跡としては、古墳時代の埋葬跡と考えられる槍立森（やりたてのもり）遺跡（吉部八幡宮大祭の時、この森に槍持ちの警固番人が立ったことから命名）があるが、未調査のため全容は明かでない。

古代から中世（14世紀頃）にかけてこの地を治めていた厚東氏は、吉部寺や寺尾（吉部）八幡宮、神宮寺などを創建したと伝えられるが、このうち吉部寺の存在については確認されていない。16世紀に入り、長門守護代であった内藤氏は吉部地方を所領した。盆地北方3.5kmの荒滝山上（標高459m）には内藤隆春所有の荒滝城跡がある。また、その東麓には、内藤氏の居館跡と伝えられる石組が残存する。一方、本遺跡の北西１kmの埴生山にも中世の城跡が所在した可能性もあるが、いずれも未発掘であるため、詳細は不明である。近世になると、毛利氏の支配するところとなる。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

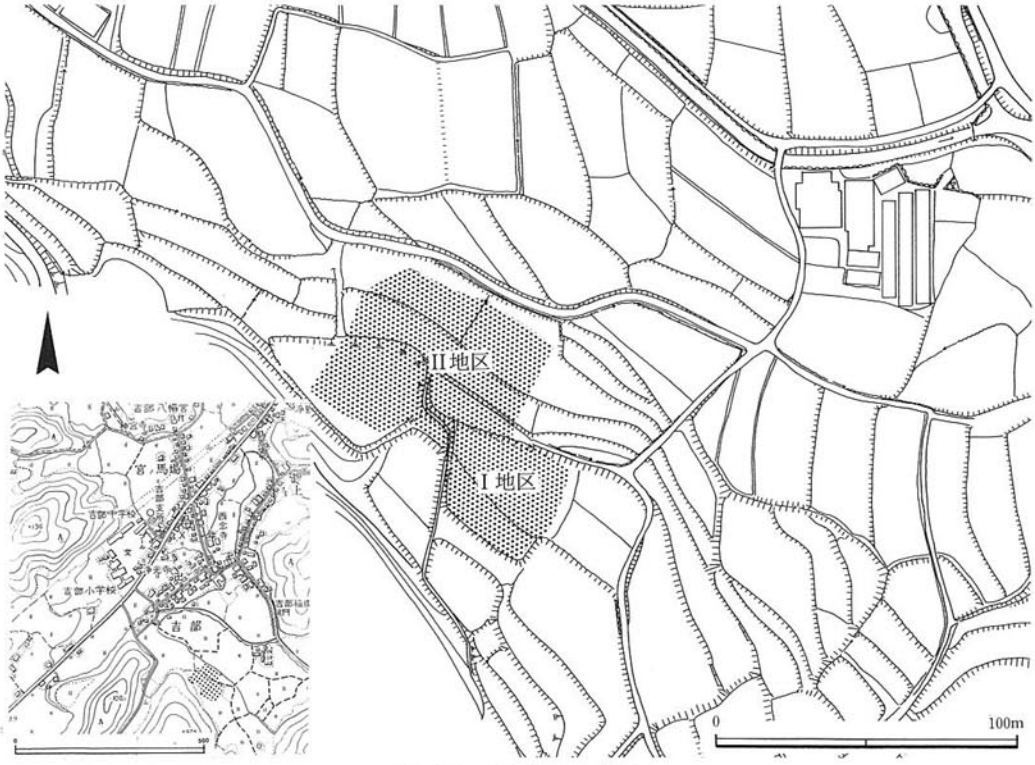
II　調査に至る経緯と概要

井戸の掘込み風景

山口県では、農業の生産性拡大をめざし、ほ場整備を推進している。これに伴い県教育委員会では、ほ場整備事業地区内の埋蔵文化財保護を目的に、事業に先だって遺跡の分布調査を行っている。

下市遺跡のある楠北地区のうち、平成５年度の事業予定地については、平成４年度に２回にわけて分布調査を実施した。その結果、土師器などの遺物や土壙・柱穴などの遺構を確認したので、工事で掘削される部分約3,000m²を中心に発掘調査を実施することになった。

平成５年４月21日から調査を開始した。はじめに試掘溝を設定して遺構面の深さや遺構の広がりなどを確認した。つぎに、重機による表土除去をおこなった後、人力で丹念に遺構を検出し、遺構の掘り込みを開始した。石組遺構や井戸などに、一人では持ち上げることの困難な大石が埋土中に投げ込まれており、石の除去に苦労した。掘り込みが完了した遺構については、写真撮影・実測により記録保存をはかった。発掘調査の成果は、７月24日に現地説明会を実施し、一般の人々に公開した。その後、設定した国土座標を使って遺構全体の測量作業を行い、８月23日すべての作業を終了し、発掘現場を下関土地改良事務所に引渡した。



第２図　調査区設定図

Y=−81170
Y=−81160
Y=−81150
Y=−81140
Y=−81130
Y=−81180
Y=−81120
Y=−81130
X=−208360
X=−208370
X=−208350
X=−208380
X=−208390
X=−208400
X=−208410
X=−208420
X=−208430
X=−208380
SK34
SK32
SK33
SK31
SK30
SK29
SB10
SK27
SK28
SK26
SP69
SK24
SP91
SP75
SK25
SB08
SP53
SP186
SB09
SP63
SP86
SK23
SK22
SD21
SD20
SK21
SD19
SK19
SK20
SB07
SK18
SD22
SD16
SD13
SD15
SK14
SK15
SD14
SK13
SD12
SP108
SD11
SD17
SK17
SD18
SV07
SV06
SV05
SD10
SF04
SF01
SD09
SV01
SK02
SK01
SB06
SB05
SV02
SK09
SK08
SV04
SB04
SK07
SD02
SK12
SK03
SF02
SP185
SD06
SK05
SK04
SD08
SV03
SB02
SK11
SD07
SX02
SD04
SB03
SP162
SX01
SB01
SK10
SE01
SF03
SD05
SK05
SD03
0
20m

第3図　遺構配置図

第4図　Ⅰ地区遺構配置図

III 遺 構

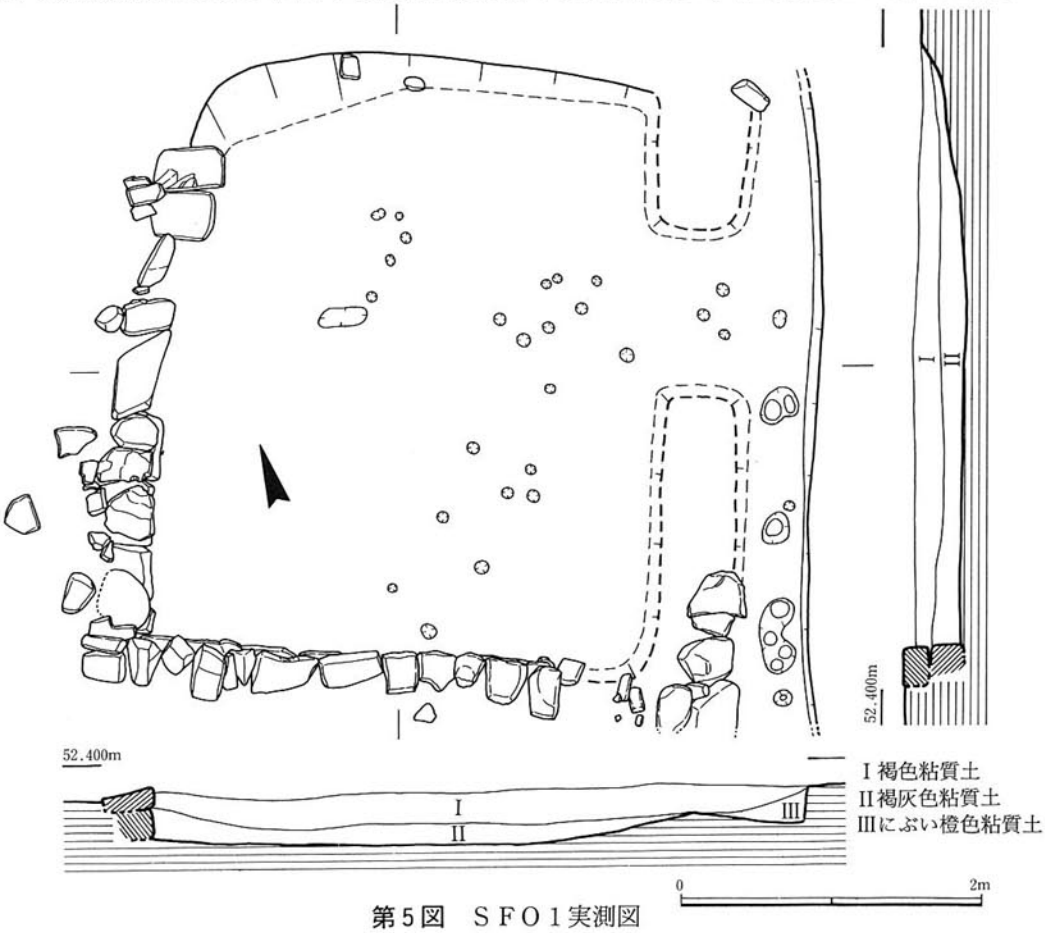
便宜上、調査区南東地区をＩ地区、他をII地区とする。今回の発掘調査で検出した遺構は、Ｉ地区の石組（溜枡）遺構４基・集石遺構２基・石列７基・井戸１基、および調査区全体にみられる掘立柱建物10棟、土壙34基、溝状遺構21基、柱穴状ピット多数である。縄文土器片や弥生土器を表面採集したが、その時代の遺構は確認できなかった。遺構の時期は古代～近世に渡り、中心をなすのは中世である。

基本的な層序は耕作土→盤土→地山であるが、地勢が低くなる北東には、盤土と地山の間に褐灰色の遺物包含層が厚く堆積する。また、II地区の北側は、屋敷を建築する際造成したと思われる暗褐色土の遺物包含層が、ＳＶ07に向かって堆積していた。

１　石組（溜枡）遺構

４基検出され、いずれも割石と自然石を使い、面を内側に揃えて組まれている。

ＳＦ01（第５図、図版３）　II地区北東端に位置し、ＳＤ01に隣接する。20cm～40cm 大の石をＬ字状に２段積みしている。平面プランは方形と思われるが、北側と東側には石がなく不明、残存状況はあまりよくない。規模は推定長径４ m、短径3.2m、深さ約40cm で、その東辺

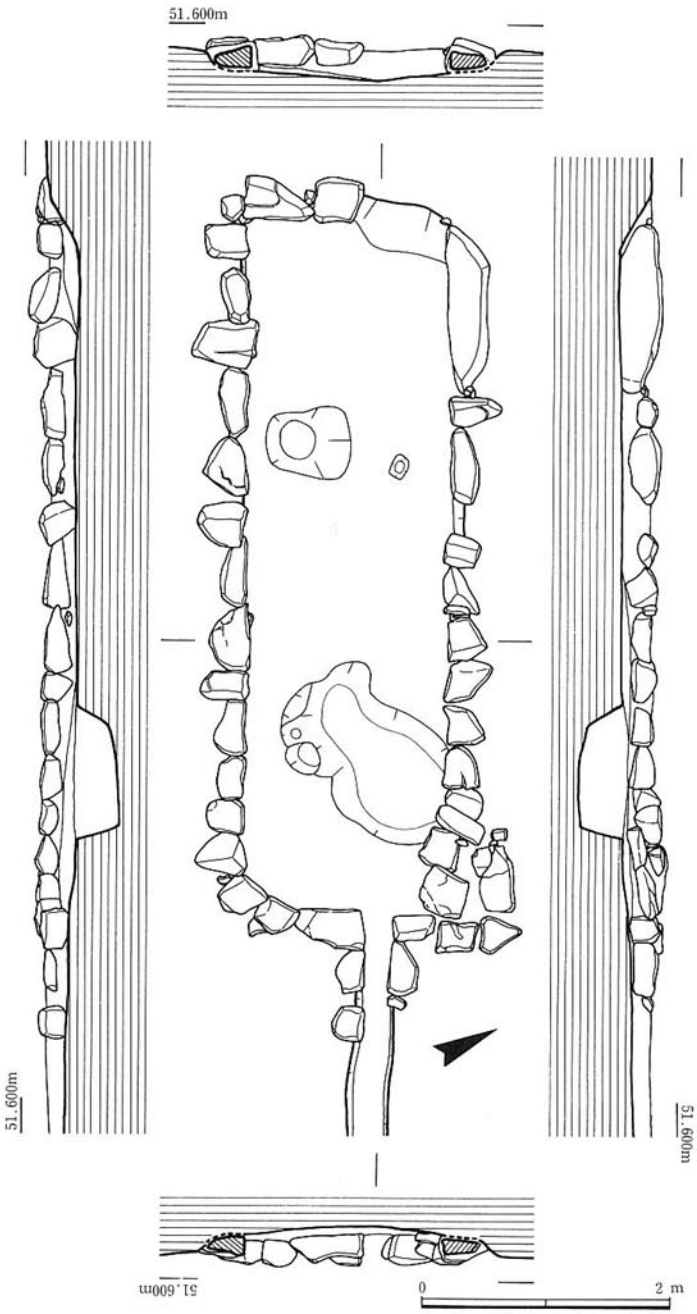


第５図　ＳＦＯ１実測図

はＳＤ01と一部つながる。埋土中より瓦質の擂鉢、鍋、土師器の皿（第11図・図版７の17）、鍋などの細片、スラグが出土した。

ＳＦ02（第６図、図版３）　ＳＦ01の南約８ｍに位置する。30cm～130cm大の石で組まれている。長径5.6m、短径1.6mの東西に長い長方形を呈し、深さは約26cm。東側面から幅38cmの溝がＳＤ01に伸びる。深さは約16cmでＳＦ02の底面よりやや高いところから、ＳＤ01の水を引き込む溝と思われる。埋土は細砂を少量含む灰色土と、底に薄く堆積している灰色粘質土の２層。遺物は瓦質土器（鉢、鍋、甕）などの細片、判読不能の銅銭１点が出土した。底面中央に深い落込みがみられる。３層の粘質土層が確認され、最下層から曲物片が出土。

ＳＦ03（第７図、図版４）Ｉ地区の南端に位置する。20cm～40cm大の石を西と北壁に４段積みしている。長径1.8m、短径1.2m、深さ60cmの平面長方形の施設。他の壁面や別の施設に使用した石で一括投棄されたとみられる。底面は灰白色粘質土が貼られていた。石製の鍋（第12図・図版８の27）などが出土。



第６図　ＳＦ02実測図

２　集石遺構

ＳＸ01（第７図、図版５）ＳＦ03の北壁上面からＳＸ02の南西隅に向かって10cm～20cm大の小石が敷かれていた。生活用水に係わる施設と思われるが、明確な性格は分からない。土師器、瓦質土器の細片が出土。

ＳＸ02（第７図、図版５）ＳＸ01の北隣に位置する。面

を内側に揃えた石囲みの中に、ＳＸ01と同じような小石が敷かれていた。南の側石が、平行して見られる。床面より土師器の皿（第11図・図版７の12）や細片が出土。

3　井　戸：ＳＥ01（第８図、図版５）

Ｉ地区南東端に位置する石組井戸である。畦畔（石積みの土手）の下に掘形の一部が架かっているが、平面形は２ m×1.8m のほぼ円形と思われる。石積の内法は、径0.7m の円形、深さは推定3.2m、底部は平底と考えられる。石積の上面より2.5m 下がったところから下位にかけてやや広がりぎみである。

石は、20cm 前後のものが多いが、部分的に比較的大きな石を組みこみ、その隙間に小さな石をつめ込んでいる。そして上面に大きな石を置いて、押さえ石にしている。

遺物は、井戸の上位から瓦質土器（鉢、鍋、甕）が出土した。

4　掘立柱建物（第９図）

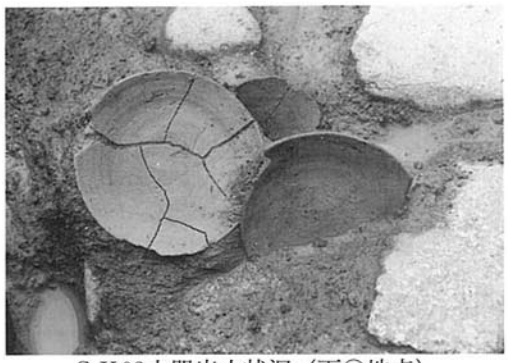
今回の調査で検出した掘立柱建物は、Ｉ地区６棟、II地区４棟の合計10棟である。棟方向はＳＤ05に対して平行、または直交させて建てられている。建物を構成する柱穴の深さは、削平を受けているため総じて浅い。

ＳＢ01　Ｉ地区南部に位置する１間×２間の建物である。桁行長は5.5m、梁行長は3.3m。棟方向は N70°W。

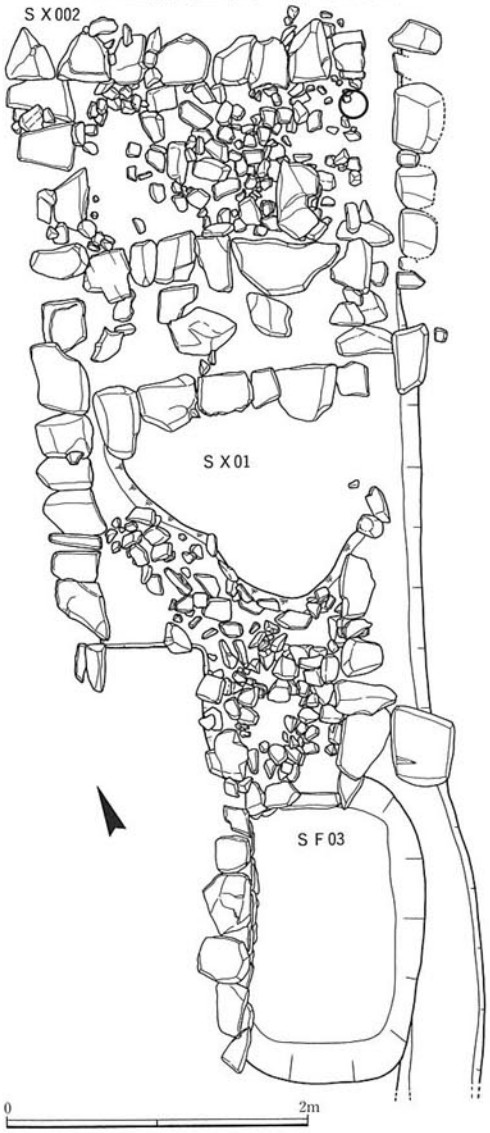
ＳＢ05　Ｉ地区北西部に位置する１間×２間の建物である。桁行長は4.3m、梁行長は2.5m。棟方向はＳＢ01と同じ N70°W。

ＳＢ06　ＳＢ05とほぼ同じ位置にある１間×２間の建物である。桁行長は4.5m、梁行長は３m。棟方向は N65°W。

ＳＢ09　地区北西部に位置する２間×３間の建物である。桁行長は7.2m、梁行長は4.5m の規模の大きい建物である。棟方向は N80°W。



ＳＸ02土器出土状況（下○地点）



第７図　ＳＦ03、ＳＸ01・02実測図

ＳＢ10　II地区北東部に位置する２間×３間の建物である。桁行長は5.4m、梁行長は４ m。棟方向はN°20E。

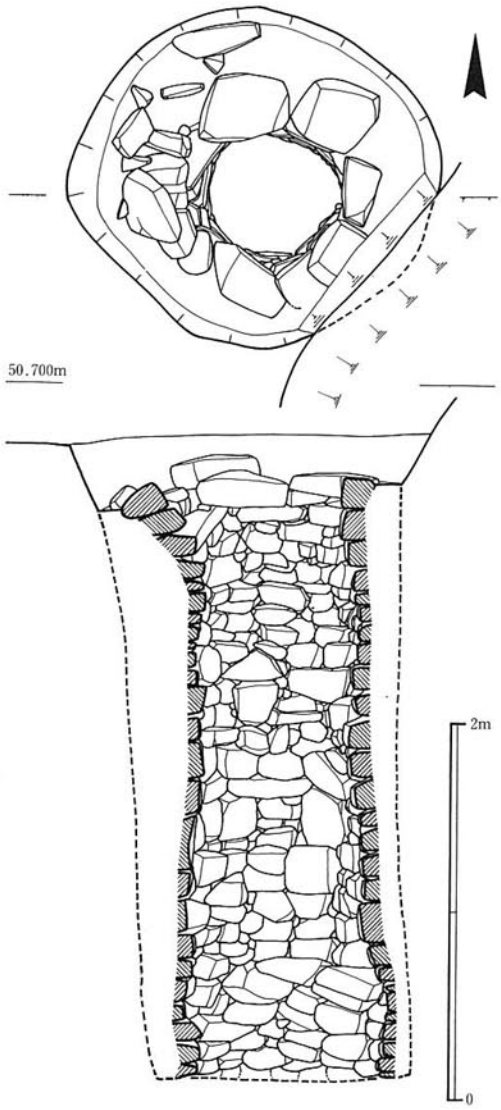
5　土　壙（第10図）

今回検出された土壙は、総数34基である。規模は大小さまざまであり、平面形は概して隅丸長方形を呈するものが多い。断面形はほとんどが浅い皿状であり、埋土も褐色を基調とする単一層が多い。また、遺物を伴わない土壙が半数以上ある。以下代表的な土壙について記す。

ＳＫ17　II地区南西部に位置する。平面形は隅丸長方形、規模は長軸1.9m、短軸1.4m、深さ40cm。灰色粘質土が約５ cm の厚さで側壁と底面に層を成しており、石や炭化木材、土器の出土状況から18世紀の土壙墓の可能性がある。

ＳＫ13　II地区中央部よりやや東、ＳＤ13に隣接する。北東部が畦畔により削平を受けている。短軸72cm、深さ9cm の浅い土壙である。遺物は土師質の鍋、瓦質の甕、土師器などの細片が出土した。

ＳＫ03　Ｉ地区ＳＦ02の西隣に位置する。平面形は不整形、規模は長軸2.2m、短軸1.4m、深さ23cmである。瓦質の鍋、土師器の細片が出土した。



第８図　ＳＥ01実測図

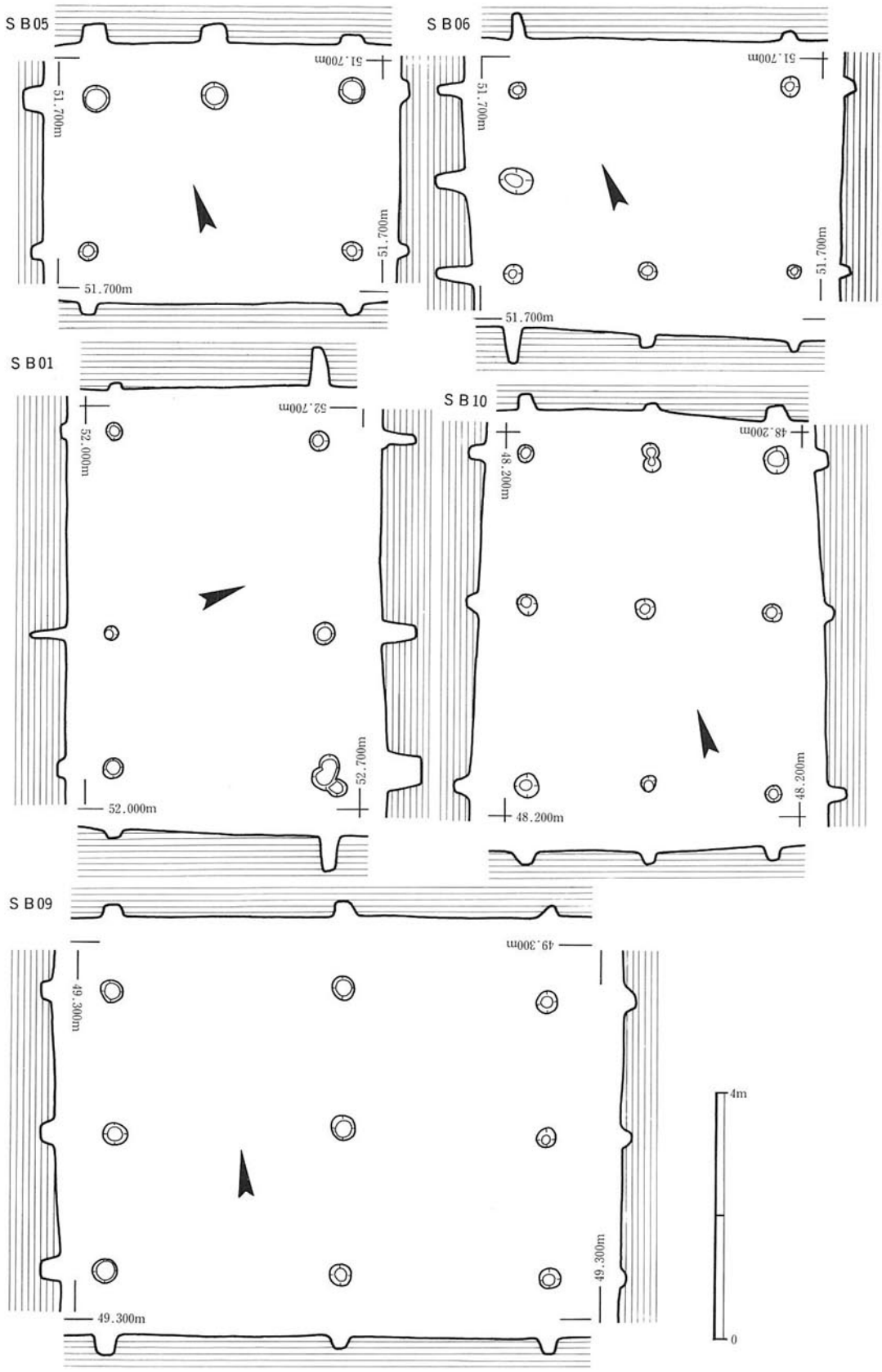
ＳＫ11　Ｉ地区南西部に位置する。平面形は隅丸長方形、規模は、長軸1.04m、短軸86cm、深さ26cm である。遺物は出土していない。

ＳＫ21　Ｉ地区の東側、ＳＤ20の南隣に位置する。平面形は隅丸長方形、規模は長軸1.7m、短軸82cm、深さ21cm を測る。土師器の皿・坏（第11図・図版７の２、20）が出土した。

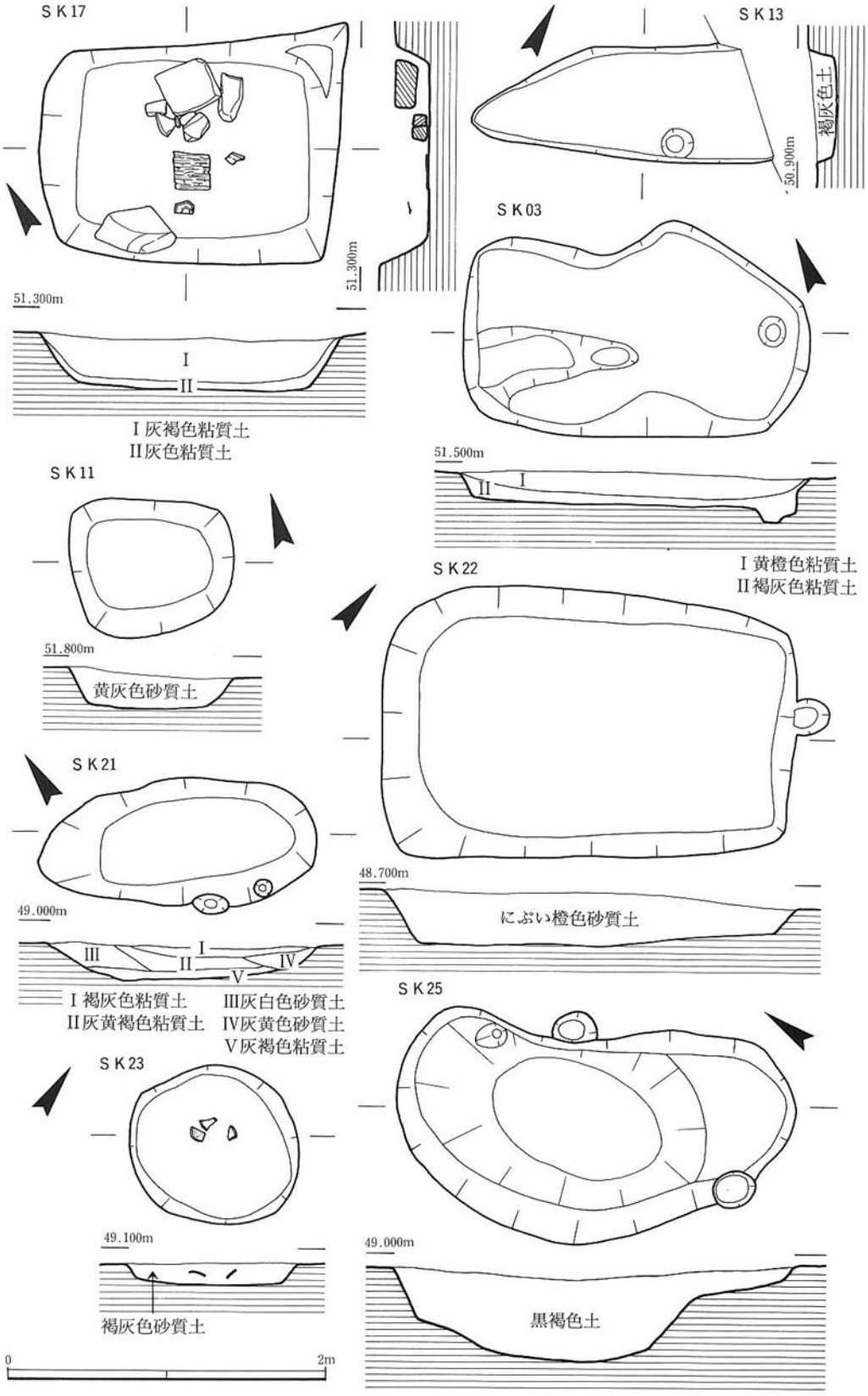
ＳＫ22　ＳＫ21より西へ3.5m の位置にある。平面形は隅丸長方形、規模は長軸2.4m、短軸1.7cm、深さ28cm。土師器片が出土した。

ＳＫ23　II地区中央部、ＳＢ08の南東３ m に位置する。平面形は円形、規模は長軸1.1m、短軸1m、深さ13cm の浅い土壙である。底面より瓦質の足鍋片や羽釜片（第11図・図版８の26）、土師器の細片が出土した。

ＳＫ25　II地区北西部、ＳＢ09と重複する位置にある。平面形は不整形、規模は長軸2m、短軸1.3m、深さ59cm。東西が２段に掘られている。遺物は出土していない。



第9図　掘立柱建物実測図


SK17
51.300m
51.300m
I
II
I 灰褐色粘質土
II 灰色粘質土
SK13
褐灰色土
50.900m
SK03
51.500m
II
I
I 黄橙色粘質土
II 褐灰色粘質土
SK11
51.800m
黄灰色砂質土
SK22
48.700m
にぶい橙色砂質土
SK21
49.000m
III
I
II
IV
V
I 褐灰色粘質土
II 灰黄褐色粘質土
III 灰白色砂質土
IV 灰黄色砂質土
V 灰褐色粘質土
SK25
49.000m
黒褐色土
SK23
49.100m
褐灰色砂質土
0
2m

第10図　土壙実測図

Ⅳ 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土器・陶磁器・金属製品・石製品などである。遺物包含層出土の縄文～古墳時代の遺物を除くこれらのほとんどは、古代～近世の掘立柱建物の柱穴・土壙・石組（溜枡）遺構・溝状遺構などからの出土品である。

1　土器　集落関連遺構を中心として、平安～江戸時代に属する土師器・瓦質土器・陶磁器などが出土したが、なかでも、土師器が大半を占めている。このほか、縄文土器・弥生土器・古墳時代の須恵器・土師器などがみとめられたが、いずれも小片で量的にも少なく、上記の各遺構や遺物包含層への混入物である。

土師器　土師器には、坏・皿・台付皿があるが、出土量としては皿が多い。坏は22が11世紀頃、19・20は14世紀のものと考えられる。22は貼り付け高台で、体部は直線的に外上方に開く。口縁部はやや肥厚し、端部は丸い。20はＳＫ25出土。体部はやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は尖る。底部糸切り。皿のうち１～６は口径4.7～7.0cm、深さ0.6～1.3cm 前後と比較的浅い小皿で、器壁は総じて厚い。底部糸切り、体部はナデ調整。７～17は口径5.7～9.6cm、深さ1.0～2.1cm 前後。これらの器壁は全体的に薄く、体部は直線的に外上方へと開く器形。９は13世紀頃、他は15～16世紀のものとみられる。18の体部の立ち上がりは短く直線的。口縁端部は尖りぎみ。底部糸切り。内外面ともナデ調整。15～16世紀の皿。21は円錐台状の台付皿。体部は外上方に短く開き、口縁端部は丸くおさめる。底部糸切りで、内外面ともナデ調整。

磁器　ＳＶ07出土の輸入青磁碗。比較的厚手の底部片で、高台は削り出し。焼成堅緻。オリーブ色の施釉。高台ぎわに蓮弁縞文の一部が確認でき、竜泉窯系のものと推定される。

陶器　24は皿。高台は低い削り出し。鉄分を多く含む胎土で、器壁内面及び外面口縁下部まで釉を施す。見込みの４か所に窯積焼成時の目痕が残る。17世紀初頭の唐津系の製品と考えられる。石製品などとともに、ＳＦ04から一括投棄された状態で出土。屋敷付随施設の埋め立て時期、すなわち、遺跡の廃絶期を考慮する上で看過できない資料である。

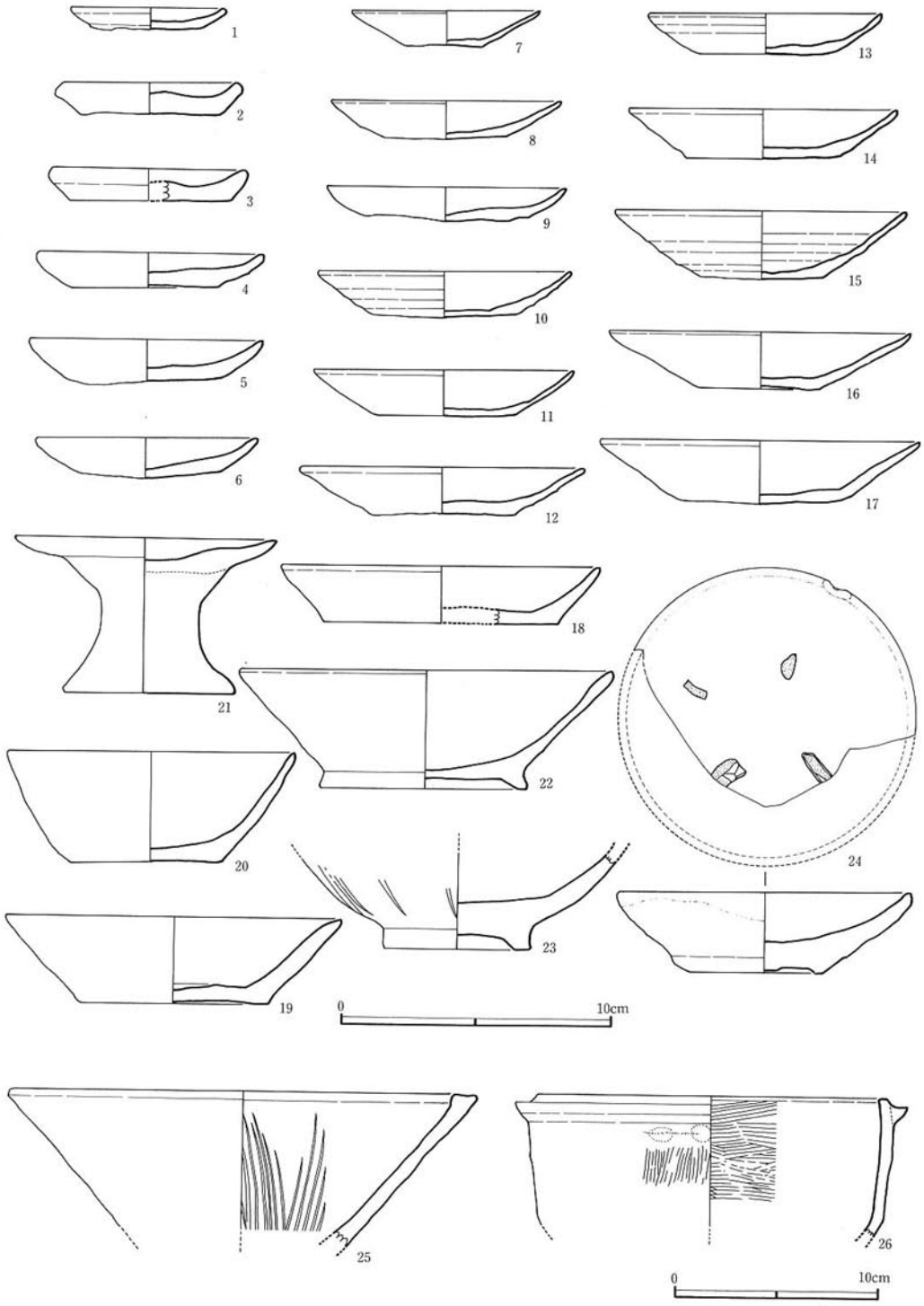
擂鉢　ＳＤ01出土。口縁は肥厚して内側に折り曲げ、端部を水平におさめる。体部は内外面ともハケ調整後、内面に６条の櫛掻き上げ。胎土には粗砂粒を含む。16世紀の所産品。

土鍋　26は口縁部の外周に突帯をめぐらせた土師質の土鍋。体部は垂直に立ち上がる。底部は欠失。外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメがみとめられる。外面には、煤が付着。口縁部の1/4残存。ＳＫ27から出土。13世紀後半のものと考えられる。

2　石製品

石鍋　27は凝灰岩製の石鍋片で、ＳＦ03から出土。鑿状加工具で整形され、外面の口縁下部周縁にわずかな削り込みを巡らせている。口縁部の1/4が残存、底部は欠失する。

石鉢　28は砂岩製の擂鉢。器壁の内外面には、鋭利な施工具による縦方向の線状の刻みがある。器壁は厚く、口縁の一部に注口が取り付く。底部欠失。ＳＦ04から出土した。



1・10・19　S P53　2・20　S K21　3　S P108　4　S P91　5　S P63　6　S K09　7・16　S D07　8・9　S P67　11　S P69
12　S X02　13・14・18　S P162　15　S V04　17　S F01　21　S P186　22　S P86　23　S V07　24　S F04　25　S D05
26　S K23

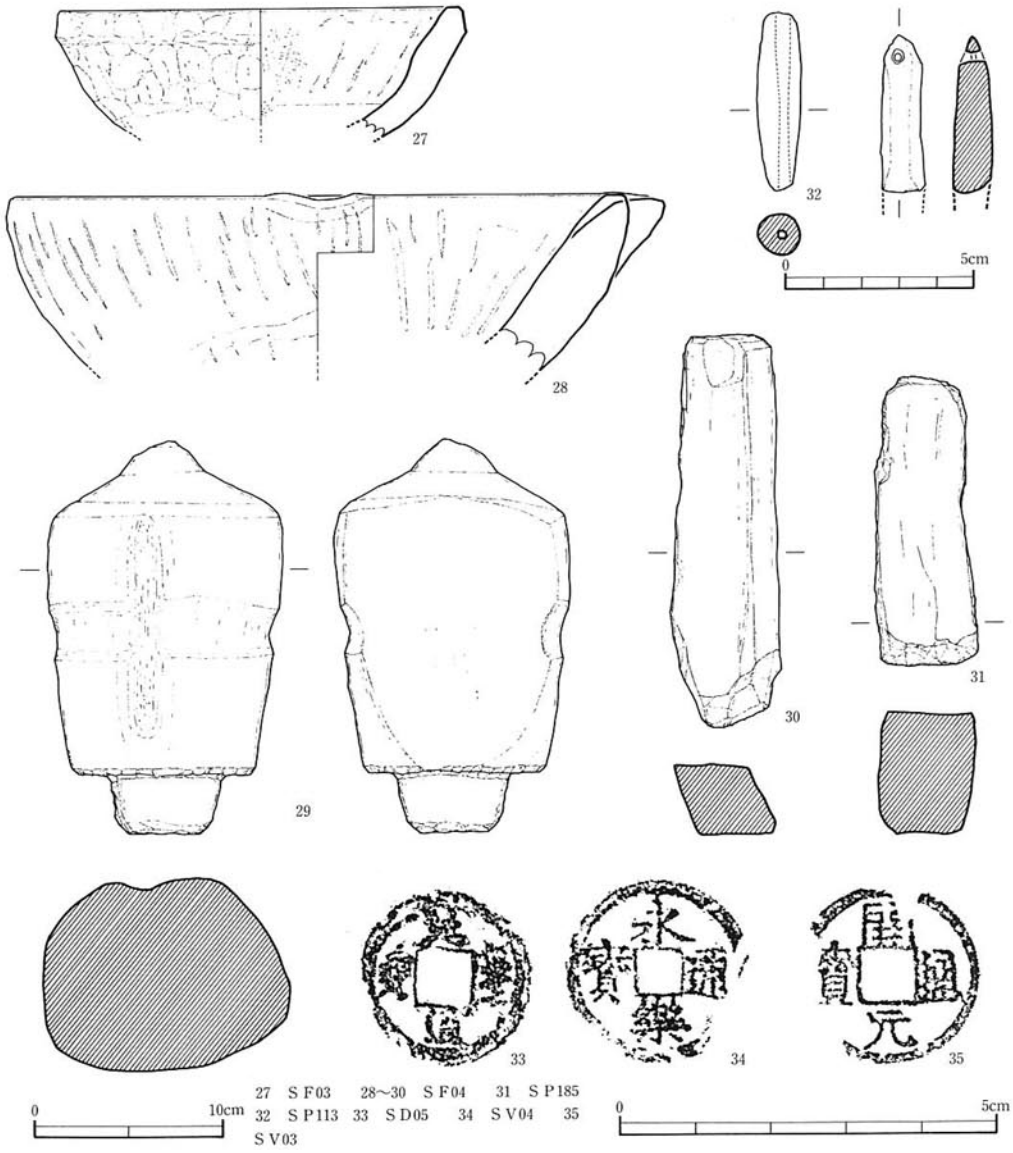
第11図　出土遺物実測図(1)

五輪塔　空風輪で、頂部端を欠く。現存高20.7cm、空輪胴部での最大径12.4cm を測る。一方のほぼ全面に削痕、反対面には縦方向に幅約1.8cm×深さ約0.4cm の溝状の削り込みがみとめられる。砥石への転用も考慮されるが、呪術的用途の可能性もある。砂岩製。

砥石　30は泥岩製。３面に使用痕あり、ＳＦ03出土。31凝灰岩製で、１面のみ使用。

3　金属製品

銅銭　33はＳＤ05から出土した「元豊通宝」で、３枚が銹着。34はＳＶ04出土の「永楽通宝」。35はＳＶ03出土の「開元通宝」。このほか、柱穴などから８枚出土した。いずれも欠損や銹化が著しく、判読不能のものが大半を占める。



第12図　出土遺物実測図(2)

V　まとめ

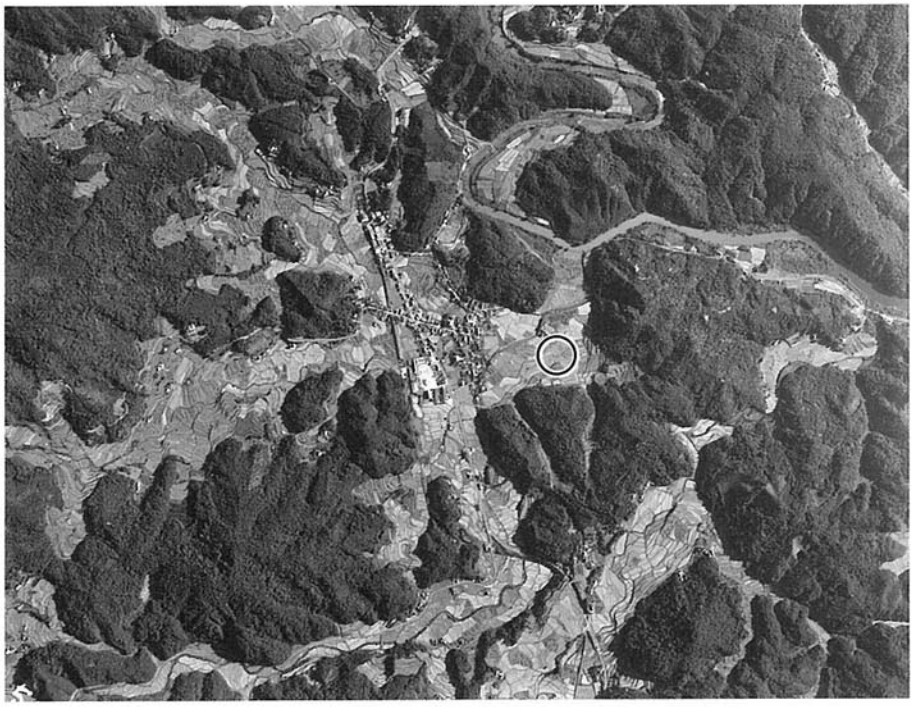
今回の調査結果、遺構としては、古代から近世の掘立柱建物10棟を含む柱穴多数、土壙34基・石組（溜枡）遺構４基・集石遺構２基・井戸１基・溝状遺構21条などがある。また、遺物は、縄文土器、弥生土器、石斧・土錘、古墳時代の須恵器・土師器などの包含層からの出土品以外、古代～近世の土師器・瓦質土器・輸入磁器・陶器・銅銭・スラグなどが出土した。

包含層出土品は、いずれも本遺跡の主体となる古代～中世に先行する遺跡の所在を明らかにするものである。特に縄文土器（甕）は、従来、県下で出土例が少なく、比較的海岸部で多く確認されているため、今後、こうした内陸部における同時代遺跡の分布状況や他地域との関連を明らかにしていく上で基礎的な資料となろう。また、土錘は、管状と棒状の２タイプがあり、弥生～古墳時代の土錘として特徴的な形態をなすものである。伴出遺物がなく、詳細な時期決定は難しいが、県内での類例（下関市綾羅木郷遺跡／弥生時代前期末）などを考慮して、ほぼ同時代所産の範疇におさめおくにとどめたい。ともあれ、沿岸地域から遠く隔たる県央山間における漁労の存在を示唆する貴重な遺物といえよう。

集落関連遺構群は、調査区のほぼ全面から検出。復元し得た掘立柱建物は、合計10棟である。これらの建物群からの出土遺物は、平安時代後半から江戸時代前半までの幅を有するが、量的には平安時代後半～鎌倉時代（４棟）と室町時代後半のもの（６棟）が多く、集落の形成が主にこの２時期であったことを窺知させる。すなわち、前者の頃、藤ケ瀬川右岸に拓かれた集落は、後者の時期に至ってしだいに背後の通称西の山北麓方向へと拡がりをみせ、前面石垣で以て段状に画する屋敷地が構築された推移が想定できる。

さて、後者、すなわち16世紀頃の吉部地方は、長門守護代内藤氏の所領である。20代内藤隆春は、荒滝山上（標高456m）に城郭を持つとともに、その東麓（現　楠町今小野）に居館を構えたと考えられている。一方、荒滝山南方に展開する吉部盆地のほぼ中央部に、内藤氏の重臣埴生氏のものと伝える山城が所在し、荒滝城の支城として盆地内を統括するための一翼を担っていたものと推定される。こうした史的背景や地理条件などから、本遺跡で確認された屋敷を含む建物群は、内藤氏の関係者、殊に埴生氏及びそれの家臣などの住居であった蓋然性が高い。他面、『地下上申』絵図によると、江戸時代中期頃の本遺跡付近は、既に水田として描写されている。したがって、当該屋敷は、おそらく17世紀初頭頃に廃絶するとともに、各遺構が埋められ、まもなく水田化されて行った経過を辿ることができよう。しかし、現時点では、それ以上の推測は困難であり、さらに周辺一帯の発掘調査に伴う関係資料の追加が期待される。いずれにしても、本遺跡は、吉部地方の生活文化の歴史的様相を伝えるのみにとどまらず、広く山口県全体の中世の館関係遺跡の実態を知る上で、欠かすことのできないきわめて重要な遺跡であるといえる。

図版 1

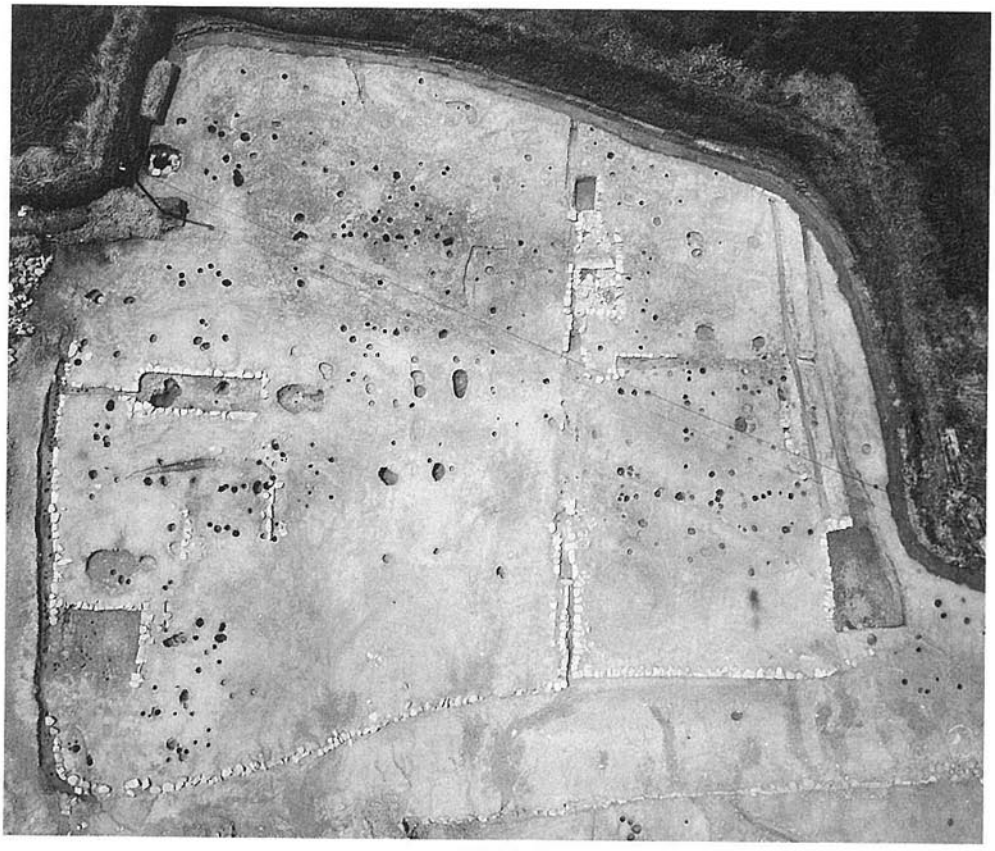


空から見た吉部盆地

調査区遠景（西・埴生山から）

図版 2

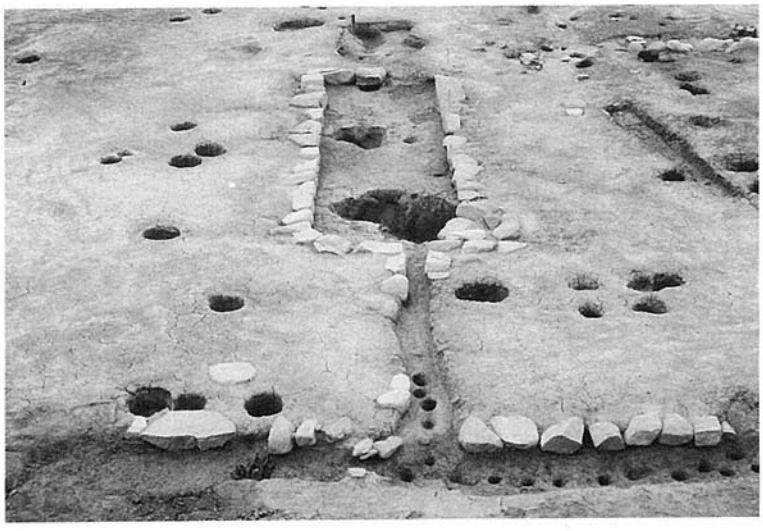
調査区全景



Ⅰ地区全景

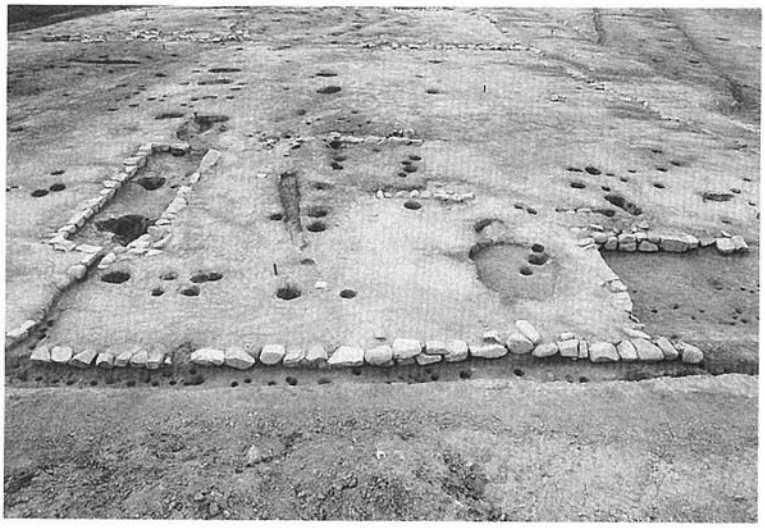
ＳＦ01完掘（東から）

ＳＦ02（南から）

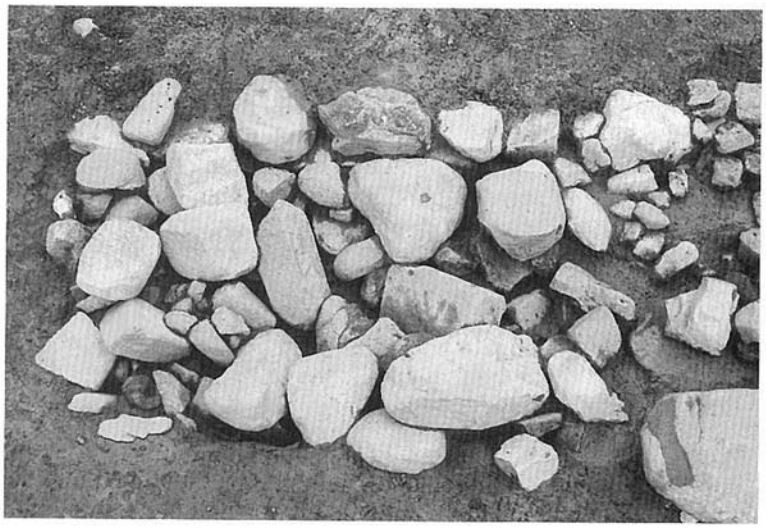


ＳＦ02完掘（東から）

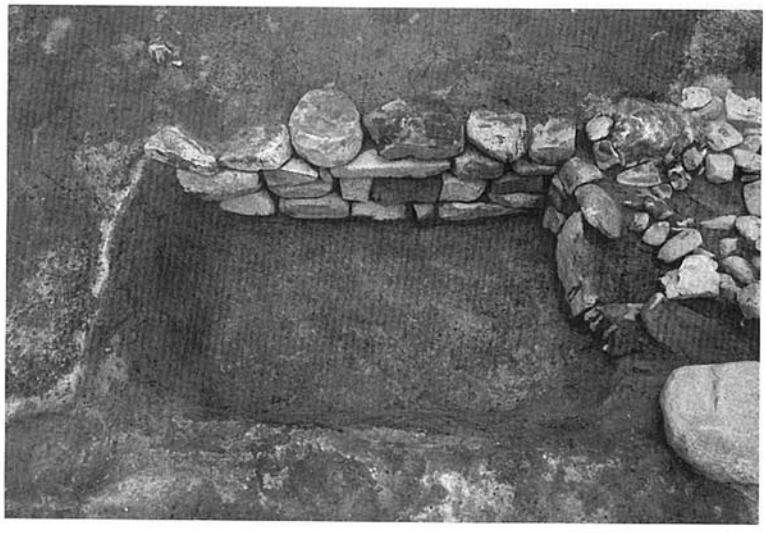
図版 4



ＳＦ01・02、ＳＤ01
（東から）

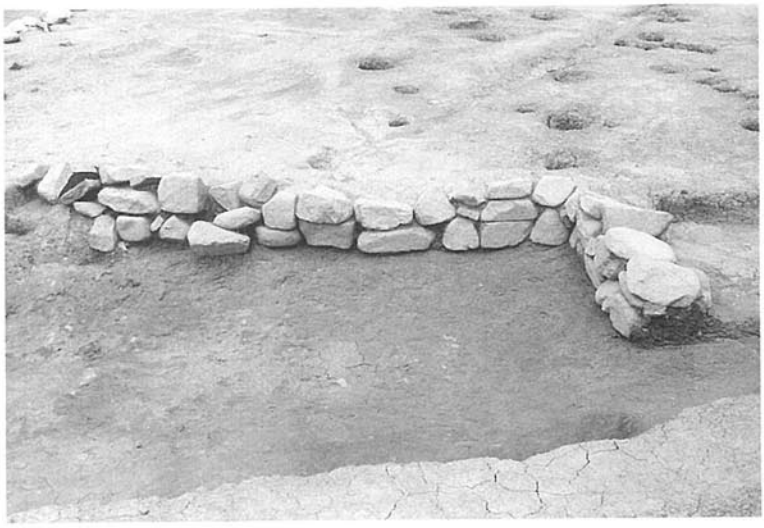


石で埋められた
ＳＦ03（東から）



ＳＦ03完掘（東から）

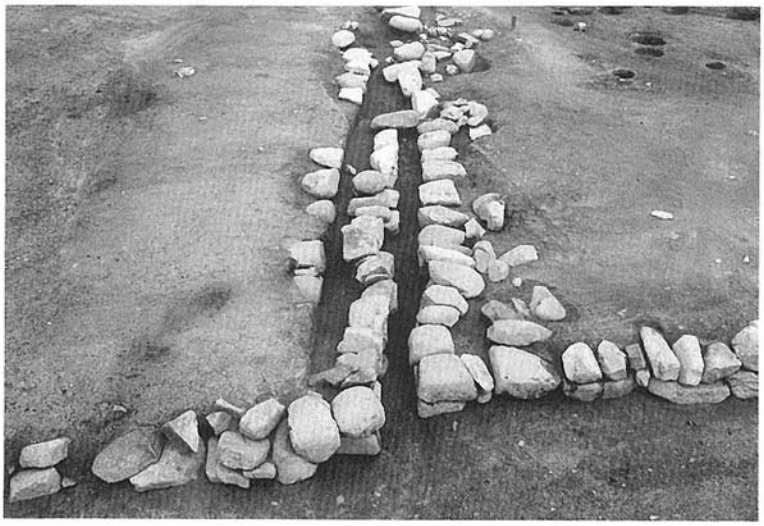
ＳＸ01・02、ＳＶ03
（南から）



ＳＦ04完掘（西から）

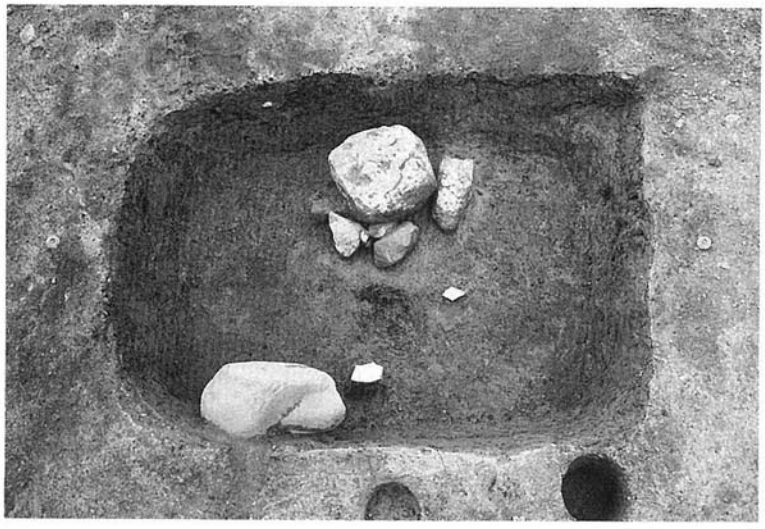
ＳＥ01（西から）

図版 6



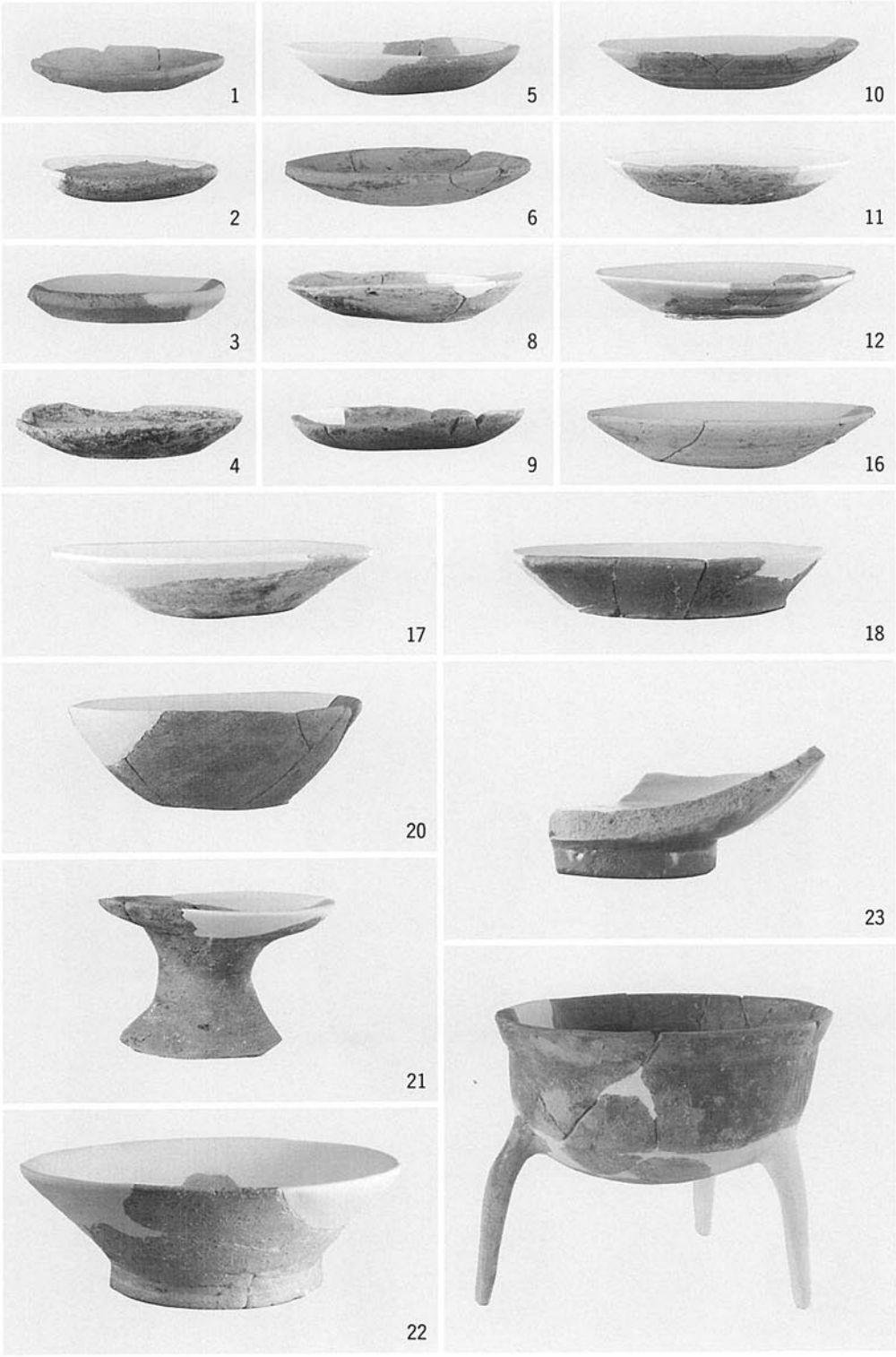
ＳＤ05（南から）

ＳＢ02（西から）



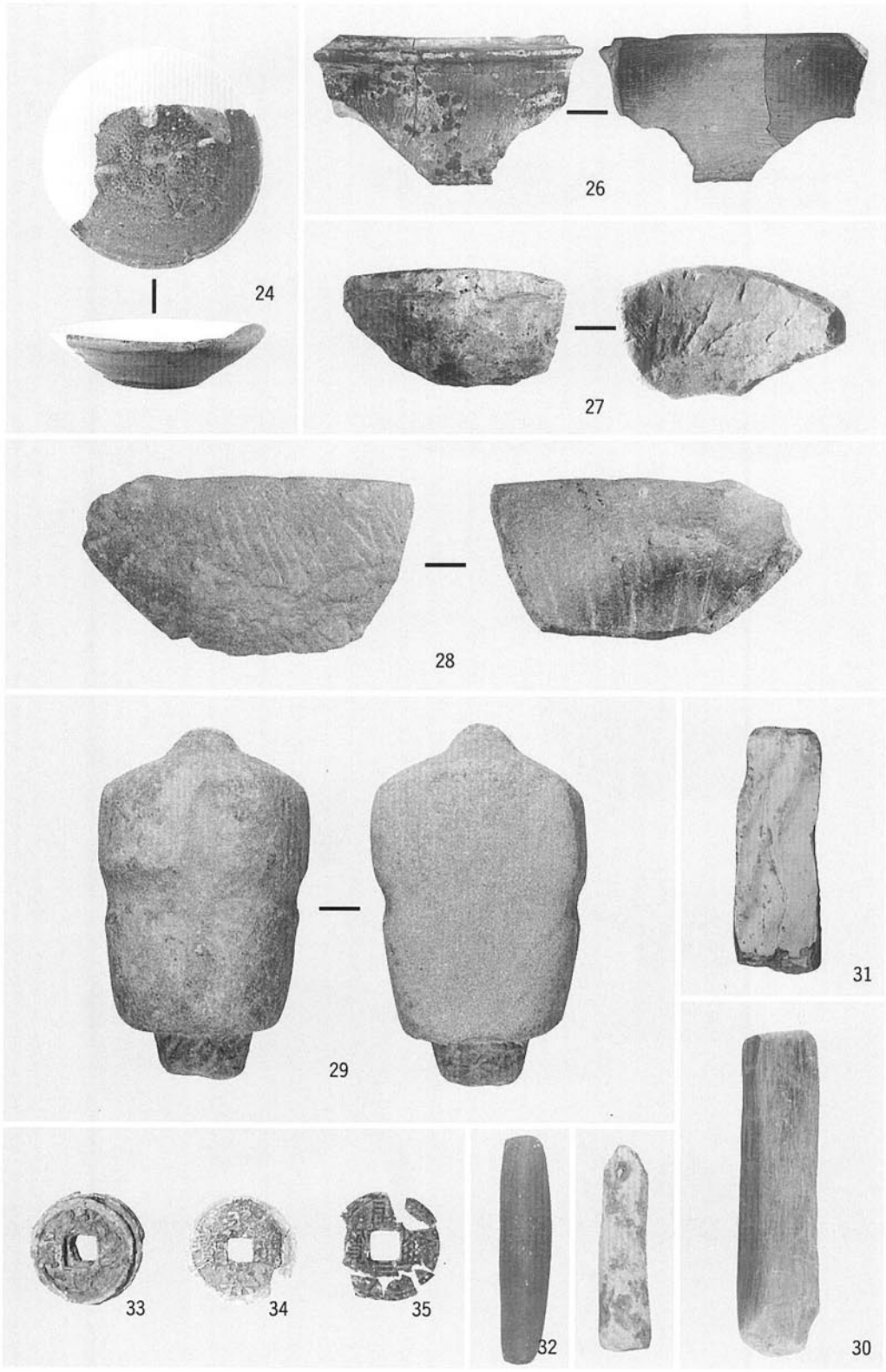
ＳＫ17遺物出土状況

（北から）



▲出土遺物(1)

図版 8



▲出土遺物(2)

山口県埋蔵文化財調査報告第169集

下 市 遺 跡

—平成５年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告—

１９９４年　３月

編集　財団法人　山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター
発行　財団法人　山口県教育財団
　　山 口 県 教 育 委 員 会
印刷　大 村 印 刷 株 式 会 社